

八ヶ岳通信

■ 文化財係

前宮遺跡発掘調査

諏訪大社上社前宮の本殿に向かう参道わきの市有地にて行われる公園整備・交流施設建設に先立ち、本計画地が前宮遺跡の登録範囲内に所在することから、平成31年4月から令和元年11月にかけて発掘調査を行いました。調査地周辺には中世に、大祝と呼ばれる上社最高位の神職の居館である神^{ごうどの}殿がおかれた県史跡『諏訪大社上社前宮神^{ごうどの}殿跡』をはじめ、古墳時代から室町時代にかけての遺跡が集中しており、諏訪地方の古代・中世史の中心地として重要な地域であると考えられています。



前宮遺跡位置図

今回の調査では、計画地の上段から古墳時代～平安時代までの住居跡や、中世(鎌倉～室町時代)の墓とみられる土坑が発見されました。これらのうち古墳～平安時代の住居址とみられる遺構は、1号住居が一边約4.5mで南西隅に竈^{かまど}を持ち、4号住居が一边約3.5mで、いずれも主軸をやや東に振っています。これらは複雑に重複して検出され、複数時期にわたって同じ場所で居住が行われていたものとみられます。各遺構からは須恵器・土師器や、平安時代に東海地方で生産され、持ち込まれた灰釉陶器^{からいゆう}が出土し、また製鉄の際に発生する鉄滓^{てっさい}とみられるものも出土するなど、当時の人々の生活の様子的一端がうかがえます。また調査区東側ではかわらけ(祭礼や儀礼にて使用された素焼きの盃)などとともに中世の墓とみられる土坑が出土しました。特に8号土坑は長方形の平面をもち、礫を組み合わせ



出土遺物

かくて柳をつくっている様子が確認されています。

また、計画地下段の交流施設が建設される地点でも調査のため3mほど掘削を行いました。その結果下段は3m以上の盛り土により造成が行われていることが明らかになり、遺構の検出には至りませんでした。

今回の調査で確認された竪穴住居群は、同じ宮川地区に所在する高部遺跡や勝山遺跡で確認されている竪穴住居群と同様に、複数時期にわたって居住が継続された形跡がうかがえます。さらに勝山遺跡からは鉄滓^{ふいご}や轆^{ふいご}の羽口など、製鉄に関する遺物が出土している点も共通することから、これらの集落遺跡同様に前宮遺跡も古代における重要な集落のひとつであった可能性が考えられ、中世にこの地を拠点とした諏訪神社大祝一族の出現を考察するうえで貴重な記録を得ることができました。



1、4～6号住居跡

茅野市文化芸術推進事業

茅野市内のミュージアムは、その文化資源を活用しながらそれぞれに活発な運営をしていますが、個別の活動となりがちです。こうした状況を解決するため、ミュージアムと関係機関の連携強化により、文化資源を効果的に活用し、地域の観光振興および地域の活性化に資することを目的とする、茅野市文化芸術推進事業実行委員会が組織されました。

2年目となる本年度は、設置者が異なる様々な分野の5館（茅野市尖石縄文考古館、茅野市八ヶ岳総合博物館、茅野市神長官守矢史料館、茅野市美術館、京都造形芸術大学附属康耀堂美術館）と関係機関（茅野市中央公民館、茅野市市民活動センター「ゆいわーく茅野」、一般社団法人ちの観光まちづくり推進機構、茅野市および茅野市教育委員会の関係部署など）が連携して茅野市文化芸術推進事業を行い、茅野市の玄関口とも言える JR 茅野駅に隣接する文化複合施設・茅野市民館内にある茅野市美術館を事業展開の事務局館としました。

本年度は、この事業の連携事業として、①「ちのミュージアム・ピクニック」(11月、2月、全2回)、②「ちのを編む みんなのサロン」(12～2月、全3回)を行いました。

① ちのミュージアム・ピクニック

全2回で、それぞれテーマを設定し、ミュージアムと体験スポットをつないでバスで巡り、各館学芸員や、一般社団法人ちの観光まちづくり推進機構のガイドが案内をしました。全2回の内容は下記のとおりです。

その1「八ヶ岳の恵みと人々の営み」

・ルート 御射鹿池→笹原→京都造形芸術大学附属康耀堂美術館→与助尾根遺跡→尖石縄文考古館→神長官守矢史料館

・内容 八ヶ岳の麓には、遥か1万年前から人が住み、文化が栄えてきました。繁栄の秘密は、山がもたらす豊かな恵みと、それを利用してきた人々の知恵と工夫。多くの実をつける山の木々はもちろん、大切な食料となった鹿をはじめとする動物たち、そして清らかな水。茅野に来たら誰もが感じる八ヶ岳の恵みと、現代まで続く人々の営みを実感していただける旅です。

その2「凍みる冬に生きる工夫」

・ルート 茅野市美術館→八ヶ岳総合博物館→笹原公民館→泉野の「穴倉」→茅野市民館

・内容 市全域が標高700mを超える茅野。氷点下15度を下回ることもあり、土の深くまで凍りつく「凍みる」冬。茅野に住む人々は、様々な知恵と工夫でこの厳しい冬を乗り越えてきました。気候を活かしてつくる冬の保存食、「凍み」の食材。農作業のできない冬の仕事として発展した寒天やのこぎり作り。先人の

知恵と努力に感動する旅です。

「八ヶ岳の恵みと人々の営み」「凍みる冬に生きる工夫」という2つのテーマを設定し、秋と冬に開催しました。

ミュージアムと体験スポットをつなぎながら、それぞれのテーマのもつ物語を参加者の皆さんに感じていただけるプログラムづくりを意識しました。茅野ならではの魅力を感じる“はじめの一步”になったのではないかと思います。

② ちのを編む みんなのサロン

茅野の魅力を見つけてつなぐ「ちのを編む」では、地元の方々の取り組みを直接うかがい、新たな視点で知ってみる「みんなのサロン」その4～6を開催しました（昨年度は、その1～3）。

その4は「農業とITを掛け合わせるとどうなる？」。農業人口が減少する中、ロボット技術やICTを活用した「スマート農業」について、大学教授、農業に興味をもつITエンジニア、地元で農業を営む方々と話し合いました。

その5は「興味を活動に！ 市民研究員」。自然・歴史・民俗・産業について、資料の展示・収集・保管・研究に当たる八ヶ岳総合博物館。その中で、地域住民が様々な分野でフィールドワークや科学工作などに携わる「市民研究員」の活動について、皆さんからお話をうかがいました。

その6は「宝の山！ 里山づくりの取り組み」。茅野市内の里山整備に関わる4つのグループの皆さんと、私たちの「みらい」につながる里山の「いま」を一緒に考えました。

その4～6を通して、茅野の宝ものを再発見し、魅力をつないでいく、そのような機会となることを目指しました。

今後も引き続き、ミュージアムと関係機関の連携により、市民が地域にある多様な文化資源を活かしながら、地域のアイデンティティを発信できるような環境づくりを目標に進めていきたいです。



茅野市美術館



茅野市八ヶ岳総合博物館

坂本養川と堰

平成 28 (2016) 年に滝之湯堰と大河原堰が「世界かんがい施設遺産」に登録されました。

堰のできた背景に、江戸時代初期に日本国中で新田開発が行われ、多くの新しい村が誕生したことがあげられます。水田を増やすために従来の河川から水を引いていましたが、上流の村と下流の村で水争いが起こりました。諏訪地方も例外ではなく、各地で水争いがありました。八ヶ岳山麓は深い谷と高い尾根状台地が手を広げたような地形となっており、河川は台地の上には流れづらい状況でした。そのため、台地上には水田が作れず、米の増産ができませんでした。

享保 21 (1736) 年、信濃国諏訪郡田沢村(現 茅野市宮川村田沢)の農家に、坂本養川は生まれました。安永 3 (1774) 年に、養川は諏訪地方の灌漑についての調査を始め、翌 4 年に堰(せぎ 汐・圳 用水路)開削の願書を諏訪高島藩に提出しました。しかし、当時は二の丸家老諏訪家と三の丸家老千野家の権力争いの最中で、なかなかとり上げられず、工事が着工できたのは天明 5 (1785) 年でした。養川は、安永 4 年から工事の意見がとり上げられた天明 3 年までの 8 年間に、藩へ 6 回願書を提出しています。

養川は、天明 5 年の滝之湯堰を手始めに、生涯 15 本の堰を引いたといわれています。堰の開削により、米の収穫量は増加しました。養川以前から堰はありましたが、養川は従来の堰を整理し、新たに開削などして、より効率的に水廻しができるようにしたのです。

養川の死後も、堰は大切に維持され、現在も使用されています。これは、坂本養川の功績と、現代まで連綿と大切に維持してきた地域住民の努力のたまものです。当館では、諏訪地方で大切に維持されている堰の歴史と重要性について令和元(2019)年 7 月 13 日から 9 月 16 日まで企画展「坂本養川と堰と人々の生活」を開催しました。

この企画展にあわせて図録『坂本養川と堰と人々の生活』(販売価格 800 円)と『滝之湯堰・大河原堰の案内マップ』

(販売価格 100 円)を刊行し、博物館で販売しています。お手に取ってご覧いただければと存じます。



企画展 信州哺乳動物研究の先駆者 — 両角徹郎先生・両角源美先生が目指した教育 — (開催期間：10 月 5 日～ 12 月 1 日)

令和の時代が幕を開けたスタートの年、心熱い教育者であり、超一流の哺乳動物の研究者として、茅野市の教育文化に尽力された両角徹郎先生・両角源美先生の業績を紹介する企画展を開催しました。

お二人の先生は、茅野市北山で誕生し、青春時代を信州大学教育学部で共に過ごし卒業された後、各地の学校で子どもたちの心に学びの灯をともし教育を実践されました。お二人の教育の原点となる大学の恩師・清水三雄教授の教えは、「よき研究者はよき指導者である」、「教師は『教える』ことに正確な事実を知らなければならぬ。また、教師が研究に従事する姿、態度が無言のうちに児童・生徒に好影響を及ぼす。」というものでした。この教えを徹底的に実践され、子どもたちの心に学びの火を付けていったのです。また、専門研究を徹底して行い、八ヶ岳山麓や西山に棲息する動物たちに、いつ、どここの山のどの辺に行けばどんな動植物に出会えるかを正確に予想することができ、諏訪の山がわが庭のようにわかっていただけたということです。これらの業績を伝える資料として、動植物の記録写真、野外調査道具、執筆された研究論文・専門書・子ども向けの出版物などを展示しました。

この企画展を熱心に見学された地元の教師からは次のような感想が寄せられました。

本日、博物館の企画展「両角徹郎・源美先生展」を見学しました。そして心に深く刻むことがあります。それは『『ウソ』を教えるような教師は、教師としての資格がない。』ということです。これからも地元の教育の一端を背負う者として、お二人の先生方の“生き様”をしっかりと引き継いでいきたいと思います。

さらに、両角徹郎先生・両角源美先生が著された言葉の数々には、教育実践だけでなく、諏訪の自然とともに未来を生きる人々へのメッセージが込められています。多くの方にご来場いただき、お二人の先生の思いに触れていただける機会となりました。



両角徹郎先生



両角源美先生

上條信彦氏「尖石縄文文化賞」最年少での受賞

故宮坂英弐氏の功績を称え、平成12(2000)年から始まった尖石縄文文化賞も、20回目の節目の年を迎えました。

第20回受賞者を決めるに当たり、令和元(2019)年8月21日に、尖石縄文考古館で選考委員会が開かれ、委員長の小林達雄氏をはじめ、委員の皆さまにお集まりいただきました。選考にはかなりの時間を要し、緊張感漂う雰囲気の中、受賞者の決定に至りました。

授賞式は、台風19号の影響もあり、当初予定していた日時から約1か月遅れることとなりましたが、令和元(2019)年11月17日に執り行うことができました。「尖石縄文文化賞」は、現在までに、1つの団体と、40代から60代まで、性別や国籍に関係なく、幅広い年齢の方々が受賞されてきましたが、令和元年度は41歳での受賞と、歴代最年少受賞者の誕生となりました。

第20回受賞者の上條氏は松本市出身で、現在は青森県にある弘前大学人文社会科学部の准教授として活躍されています。植物質食料加工具の研究を行い、著書『縄文時代における脱穀・粉碎技術の研究』に成果がまとめられています。その研究は日本国内にとどまらず、東アジアを中心とした世界各国にまで及びます。

今まで狩猟の重要性が唱えられてきた縄文文化ですが、上條氏の研究により、縄文人が植物質の食料加工にも、時間と手間をかけてきたということが明確となり、大変注目を集めています。今後の研究にも期待が寄せられています。



記念講演の様子

守矢文書からみた改元の風景

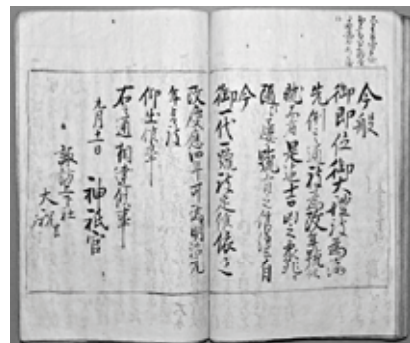
日本では西暦2020年に平成から令和に改元されました。元号は中国発祥の暦の制度でしたが、現在使用している国は日本だけとなってしまいました。日本では、明治元(1868)年9月8日に、「一世一元の詔」が出されるまで、様々な理由で改元されてきました。その主な理由は、天皇の代替わり、祥瑞(めでたいできごとがあった時)、災異(天変地異や大火災)、干支(甲子・辛酉)などです。しかし、以上の理由ですと、頻繁に改元され、昔の人も大変だったようで、明治時代に中国・明の時代から行われるようになった天皇の代替わりごとに改元される方式に変わりました。

慶応2(1866)年12月25日に孝明天皇が崩御し、翌3年1月9日に第2皇子の睦仁親王(のちの明治天皇)が皇位を継承しましたが、社会情勢が混乱しているなかでの即位の礼は先送りされました。慶応4年8月27日に即位の礼が行われ、9月8日に「一世一元の詔」が發布され、「明治」と改元されました。

慶応4(1868)年の『参籠所日記』によると、諏訪神社に改元が伝えられたのは9月25日のことでした。高島藩の郡奉行から呼び出しがあり、上社からは権祝矢島左京と副祝長坂主計が出向き、太政官から諏訪上下社へ改元の通知が渡されました。

布告の内容は、一世一元のことと、慶応4年を明治元年とすることが記されていました。布告が出された日付は9月11日で、神祇官から神社へ発布されたのは改元の3日後であることがわかります。諏訪上下社に伝えられたのは、9月25日なので、神祇官から発布された14日後でした。

昔は、今と違って伝達に大変時間がかかりました。また、神社に情報を伝えるのに、東京の神祇官から、東京に詰めていた高島藩の役人に伝えられ、この役人から手紙で諏訪に伝えられたことがわかりました。



慶応4(1868)年「参籠所日記」(守矢文書)